る。母親の養育に関する資料も収集できた段階であり，今後，データの検討に入る予定である。

(2) 児童期の社会化過程に関する縦断的研究

これは，名古屋市青少年問題協議会，名古屋市教育委員会による「児童の心身発達の追跡研究」の一貫として行なわれており，児童の社会的行動——達成行動，自立行動，道徳的判断および性役割行動の要因分析に主力を注いでいる。

2. 青年期に関する研究

最近，青年心理研究の展開過程について若干，考察する機会に恵まれた。「青年期へのアプローチの仕方」と題するテーマのもとに，青年心理研究の現状，青年心理研究の方法の現状，さらに，青年心理研究への理論的枠組等を検討した。しかし，この青年心理研究の方法論の実証的検討は，今後の課題としてのこされた。

つぎに，青年期の自我にかかわる問題として，われわれは，困った場面における自己開放性について，中学生および大学生を対象に研究を進めている。大学生の自己開放性についての検討は，青年心理学研究会（代表依田新）編「わが国における青年心理学の発展」に，「困った場面における自己開放性についての一研究」[注1]として蔭山氏と共同で投稿した。また，「困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての一研究」を本巻に投稿した。

さいごに，中学生，高校生の社会的態度——保守的，革新的および大衆社会的態度——について，附属中学，高校生を対象に，大学院博士課程速水敏彦と検討中である。この成果は，他日発表の予定である。

なお，上記以外の共同研究として，過疎グループ会員とともに，「いわゆる過疎地域の家族関係」について離村者の追跡調査の資料から，出身地とのつながりや都市での適応状況等の検討を進めている。 (1973. 12. 20)

注1 困った場面における自己開放性についての一研究（蔭山氏と共同）青年心理学研究会（代表依田新）編「わが国における青年心理学の発展」金子書房 1973

課題および現況　水野欽司

1. 一年は短いもので，雑件に追い廻されているうちに，あっさり過ぎ去ってしまった。従来からのテーマである多次元データの解析法の研究については部分的な検討を進めることができたが，目標にしていたそれらの体系づけのレベルにまでは至らなかった。これらの研究領域は48年9月の日本行動計量学会の発足にみるように，急ピッチで新しい拡張期に入っており，せいぜい中央での動向に遅れないよう努力したいと思っている。

文部省科学研究費総合研究（A）「応用多変量解析の研究」（代表者，統数研林知己夫氏）については，文献研究と一部のプログラム・テストの域に留まり現在その先を目指して検討中である。

2. 学外研究グループとの共同研究としては以下のものがある。これらはいずれも調査を主体とする研究である。

愛知県教育委員会よりの委託研究「学歴評価に関する研究」（代表者，愛教大橋爪貞雄氏），および名古屋市教育委員会・家庭教育問題専門委員会のプロジェクト「親子の価値観のずれに関する研究」（代表者，名大塩田芳久氏）が，現在，分析作業中である。

中部広告研究会（電通名古屋支社）におけるマーケッティング・データの分析技術の研究として，47年度に「耐久消費財による単調順位パターンの作成」（続仲彦と共著，中部広告研究，4号）を報告したが，48年度ではこれを本格的に進めるものとして「調査データの一貫処理システムの設計」なる主題の下で継続中である。

いずれの場合にも，調査データの分析面で新しい試みを取入れることに努力している。

研究の経過について　大橋正夫

1. 対人関係の構造について．これについて私の考え方を発表する機会が与えられた（前巻参照）が，それに対して若干の反響があった。しかし，まだ不十分なものであるので，今後とも考究を続けていく予定である。

2. 印象形成の研究．前年度は，最年度にひきつづき，本紀要に2篇の報告をした。その1は，「パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究」の第3報告である。ここにおいて，従来の線型モデルでは明ら